北陸石仏の会々報

第35号
平成21年9月15日発行

編集と発行
北陸石仏の会
(日本石仏協会北陸支部)
代表　北村市朗
〒939-1315
富山県砺波市太田1770
尾田武雄 方
電話 0763-32-2772
振替 00740-2-11974
(年会費 3,000円)

奥山峠の地蔵菩薩

志賀町安津見から安津見川沿いに山道を登り峠を越え、吉田川沿いに七尾市七原町から吉田町へと下りる道がある。県道一六号線となっており大型車は通行できない。また冬は雪のために閉鎖される。

能登有料道路の西山インターで降りると、そのすぐ隣の集落が安津見である。このあたりは志賀町堀松の日蓮宗久榮山栄妙廣寺の門徒が多く妙廣寺第二十二代の日演と門徒によって建てられた「南無妙法蓮華経」と書かれた題目塔がいくつも建てられている。安津見集落の四ツ角にも立派な題目塔が建てられている。「弘化三丙午正月廿九日　安津見搆中」「久榮山日演拝書」の銘が記されている。石工名が記されていないのであるが、その手法や造立年からみて、地元安津見の石工、三蔵の手によるものではないかと考えられる。

安津見の集落を抜けると山道に入る。右下の谷には安津見川が流れている。登り初めのうちは普通の小川なのだが、奥に入るにしたがってだんだんと水の量が少なくなってくる。道のほうもしだいに狭くなって、カーブの連続である。しばらく進むと左手山側の道路脇に、薬師如来像が見えてくる。そこで車を降りてみる。

そして反対側の谷の方へ少し下りて行くと「薬師如来の霊水」

という湧水がある。このあたりまでやってくると、川の水はほとんど無くなっており、これではもう川と呼べそうにない。

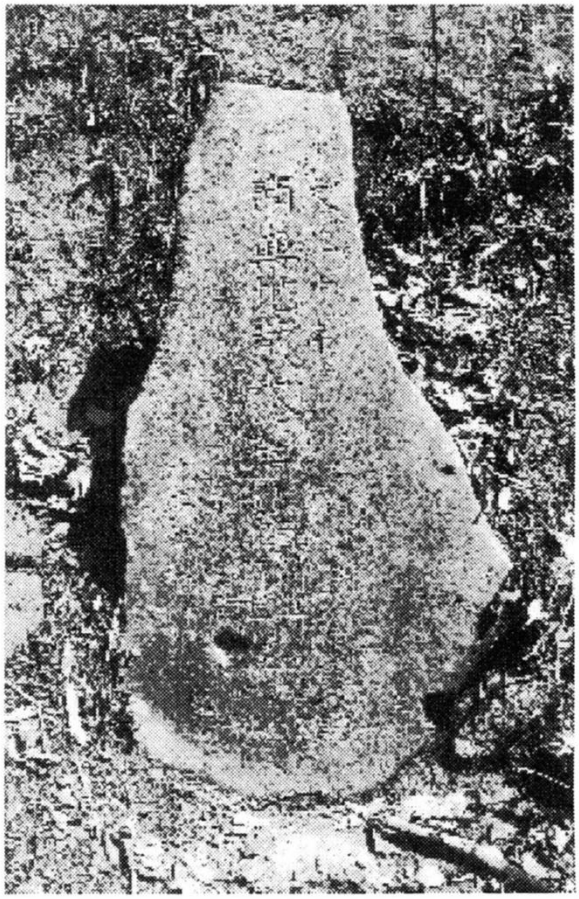
霊水をいただいて車に乗り、走りだしたそのすぐ先にまた題目塔が建てられている。茂みに覆われており、うっかりすると見過ごしてしまいそうだ。ここは安津見の集落から三キロメートルほどの所である。安津見の人達の厚い信仰によって、このような奥地にまで題目塔が建てられているのである。

そしてさらに奥へ進むと左に分かれる道がある。その道を行くと赤蔵山の山頂を通り、御手洗池がある憩の森のほうへ下りるようだ。そちらの道へも行ってみたくなるのだが、体も車も一つなので同時に両方へは行けない。そのままっすぐ進むことにする。少し行くと、七尾市との境界を示す標識が見えてくる。安津見の集落からは四キロメートルほど走ったところだ。

奥山峠に到着である。このあたりは険しい峠なので、車が通れるよう深い切り通しとなっている。道幅も充分にとってあるので、楽に峠を越えることができる。切り通しの横には、峠の上を通る細い道があるように見える。これが旧道なのだろう。今ではほとんど通る人がいないのかそれが道であるのを見逃してしまいそうだ。

境界の標識を過ぎてさらに三十メートルほど進んで、左手の切り通しの崖のほうを見ると、なにやら文字が刻まれた石塔が建てられている。車を降りて近づいてみると……。

前面を平らに加工した石塔で、中央に「南無地蔵大菩薩」と刻まれており、その下には蓮座がみられる。「南無地蔵大菩薩」の右には「文化十年」そして左には「左あすみ」と記されている。現在の車道ができる以前は切り通しの上の旧道のほうに建てられていたのだろう。



「南無地蔵大菩薩」と書かれた石塔は県内各地でいくつかみられるがその多くは「南無阿弥陀佛」「南無観世音菩薩」等と併記されており寺院境内あるいは寺院門前に建てられている。

地蔵といえば一般的には丸彫りや半肉彫りの姿を彫られたものが思い浮かび、寺院境内や墓地、路傍など様々な所に数多くみられる。そしてこのような山越え道の峠に立てられているのを見かけることも多い。

この地蔵は文字で記されているので、その姿を見ることはできない。それゆえ各自が自分の頭の中に思い浮かぶ地蔵様をお参りすることができるであろう。しばらく見ているとこの石塔の形は、地蔵が座っている姿に見えてくるではないか……。

「左あすみ」とあるが、その「あすみ」は「安津見」のことである。道標を兼ねているのだろうが、左方のみが記されており、右方の表記がみられない。この場所は峠であって道の分岐点ではないので、片方のみを記せば、その反対方向は表記しなくてもわかるのだ。しかし分岐点でない場所で、なぜその必要があったのだろう……。

ここは峠である。しかも木々が覆い茂り、日中でも薄暗いのだ。峠でゆっくりと休憩をして「さあ、出発だ」と思ったら、道はどちらも下り坂である。自分がどちらから登ってきたのかわからなくなってしまう。それでは大変だからと思い、片方だけでも表記したのではなかろうか。

「左あすみ」だけが記されているので、きっと安津見の人達が建てたのだろう。

あれこれと自分勝手な思いを巡らせたところで車に乗って、次の石仏を訪ねようと七尾市街へ向かった。

車は止まっているあいだに勝手にその向きを変えることはないので、出発の時には、地蔵様で車の向きを確認することはなかった。

金沢市　滝本やすし

ご案内

・北村市朗・山本昭治著『越前府中の石佛ほか』が発刊されました。中世石造物から石塔まで、写真など豊富に入り、読みやすい著書です。

・笏谷石研究書の第三編『越前笏谷石第三編　よみがえる歴史と人間像』が福井新聞社より発刊されました。各地に遺る笏谷石と、近世末期から近現代に至る笏谷石のビジネスの歴史を、フィールドワークに基づいて追及する画期的研究書です。定価本体二、二〇〇円＋税です。ご希望の方は事務局尾田武雄まで連絡ください。

・北村市朗会長が、福井県内善光寺式仏（一光三尊善光寺式阿弥陀仏）93点を集めた写真展を越前市のギャラリー利兵衛で開催された。

2009年(平成21年)4月21日(火曜日)　福井新聞

県内善光寺式仏93点

越前市 北村さん 20年掛け写真、展示

越前市の郷土史家、北村市朗さん（74）が約二十年掛けて撮り集めたほぼ県内全域を回ったのち像が一つの光輪を持つ写真展が同市元町のギャラリー利兵衛で開かれている。金銅仏や木仏、石仏など県内で探し出した一光三尊善光寺式阿弥陀仏を集めた。北村さんは「ライフワーク」と話している。

北村さんは、福井市出身。地元の高校を卒業後、大阪の会社の転勤で三年間過ごし越前市に移り住んだ。定年後、善光寺信仰と一光三尊について調査を始めた。越前市は中心部の武町に自の三尊寺に隣接した「善光寺城跡」があり、通称「善光寺通り」が残るなど縁が深い。

写真は市内の三尊寺で引接寺の金銅仏、福井県で仕上げた大谷石の浄土阿弥陀仏に始まる。当初は四十八体を目標に始めていたが、調べ歩くうちに郷土史や歴史関係書からの情報も多く増えた。写真は総数で三百二十二点。

展示期間は四月五日から十月二十一日まで行われているのに合わせて開いた。善光寺式は知られていないだけで県内にはかなり多くあるという。北村さんは「ライフワーク」と話し、さらに調査を進めていきたいと話している。

県の郷土史家に一光三尊善光寺式阿弥陀仏の写真展を開いている北村さん＝越前市元町のギャラリー利兵衛

下仁歩道祖神

――八尾町仁歩地区の道祖神文字碑訪問記――

二〇〇九年一月二十一日、八尾町コミュニティーセンターの「八尾の獅子頭」展を上大久保在住の電力OB坂本光作氏を同行して見に行った。

帰り際に受付にあった小冊子「八尾の近代民話」をめくっていたら「丸山道祖神」のページが目に入り、イラストで道祖神の文字が描かれているので購入して帰った。

文章をそのまま引用します。

「丸山道祖神」

「下仁歩集落のほぼ中央に「丸山」という小山がありその上に、「道祖神」の碑が建っています。古くから丸山をこのあたりの神様として、集落の人々がお守りしてきました。

語り伝えられる話には、集落の家で、慶び事や、あるいは弔などがあれば、いつ、どこで、何があるので、何人分の「御膳」「お椀」などの家具をお願いすると、つたえたとおりの家具が出してある「ほら穴」があったのだそうです。

道祖神は、丸山の持ち主で、山麓にすむ住人、丸山孫四郎という実在した人が、ある日夢枕に「わしはこの地に永くいるのだが、未だ世に出ることもない。そこの「丸山」に祀ってくれないか」とお告げがありました。

明治二十九年九月に、石工の若林長太郎に「道祖神」と刻ませた「石碑」を作らせ、村人の力を借りて建立したのだそうです。以下略」

道祖神の文字碑は富山、新湊、滑川、宇奈月で報告されているが八尾ではないと思っていたのでさっそく坂本光作氏にお願いし訪問することにした。坂本氏は八尾町仁歩地区三つ松出身で、この地域にも古い親友がおられ、具体的な場所を訪ねてさがしあてることができた。そのときの写真です。

道祖神の文字を刻してはあるが、別れ道や村境にあるのではなく伝承の椀貸しの神様や祖先神を象徴した石碑ということなのでしょうか。

二〇〇九・七・十六

平井一雄

富山市（大沢野）坂本

観音堂祭礼

平成二一年八月二二日午後五時から大沢野坂本地区の観音堂祭礼が行われた。

ここの観音堂はおそらく富山県でただ一つと言ってもよい茅葺のお堂だった。

ケーブルテレビでも紹介されたので見られた人もいると思いますが、このほど解体されて同じ場所で瓦葺の新しいお堂に生まれ変わった。

一九九三年（平成五年）に村人有志で茅葺屋根の補修を行っているが一五年たった現在痛みが激しく、材料の萱材が入手困難と屋根職人がいなく、本場五箇山の職人へ依頼すると莫大な費用が予想されることなどで瓦葺のお堂に建て替えることになったという。

解体のため仮遷座された時、石造阿弥陀三尊の台座に記されている銘文がはじめて解読された。

安政四年巳年七月敬白　當邑中布尻石工とある。安政四年（一八五四）は江戸時代幕末である。

今から一五五年前になる。

お堂も同時代と考えられる。戦時中はよくわからないが通算一五五回の観音祭がおこなわれたことになると世話役さんが挨拶された。地区民の信仰の篤さに頭が下がる。

帝龍寺住職による心入れの読経のあと西国三十三番のご詠歌が地区民有志により詠われた。

二〇〇九・八・二五

平井一雄

北陸石仏の会 第39回 例会案内

敦賀方面の石仏めぐり

拝啓梅雨の候、ますます御健勝のこととお慶び申し上げます。日頃は大変お世話になっております。下記のように北陸石仏の会例会を開催しますのでご案内します。

月　　日　**平成21年10月11日（日）**

時　　間　集合　大沢野文化会館　午前6時30分　砺波駅南　午前7時20分
　　金沢駅西口　午前8時　武生駅　午前9時20分

参加費　5,000円
　　弁当は持参してください

申し込み　次の事項を記入の上はがきで
　　住所・氏名・電話番号・集合場所　できれば携帯電話番号

申し込み先　939-1315　砺波市太田1770　尾田武雄方
　　北陸石仏の会事務局　電話 0763－32－2772

締め切り　**平成21年10月5日**

案内は北村市朗会長と石造物研究家山本昭治氏

敦賀方面石仏めぐり

●A南越前町八乙女　名号塔　徳本　天保3年（1832）　義賢

●B敦賀市

①井川　新善光寺　時宗
　来迎弥陀三尊　花崗岩　鎌倉末
　六地蔵　笏谷石　江戸

②曙町　気比神宮
　狛犬　笏谷石　大神下前神社
　　宝暦7年（1757）
　角鹿神社　享保11年（1726）
　古殿地　享和元年（1801）
　庚申神社　寛保3年（1734）

③松島　来迎寺　時宗
　六地蔵立像　笏谷石
　　明応4年（1495）

④原　西福寺　浄土宗
　多宝塔　笏谷石　正保4年（1647）
　宝篋印塔・五輪塔・板碑など
　十三仏　花崗岩
　辻堂地蔵　寛正5年（1464）

⑤関　村西端
　弥陀三尊　花崗岩　正和2年（1313）
　廻国供養仏　笏谷石　元文4年（1739）
　庚申供養塔　笏谷石　享保17年（1732）

⑥市橋　村の上下
　ワレ地蔵　花崗岩（金剛界大日如来坐像）
　　バン　出村廿人見水口
　　／暦応二年二月十八日
　さかさ地蔵　花崗岩
　　（金剛界大日如来坐像）

第38回七尾市例会